

露清の狭間のカザフ・ハーン国

——スルタンと清朝の關係を中心に——

野 田 仁

はじめに

中央アジアのカザフ草原を中心に成立していたカザフ・ハーン国は、17世紀以来、ジュンガル（カルマク）の侵入に悩まされていた。18世紀に入り、カザフのハーンは、まず西方のロシア帝国へ、次いでジュンガルを滅ぼした東方の清朝に対して使者を派遣し、両者に臣属するかのような政策を取った。この18世紀後半という時期は、19世紀前半のハーン国解体を経て近代を迎えるカザフスタン史において、もっとも動的な時代の一つであった。

上の18世紀の状況は、すでに佐口透により「二重朝貢」として示されている⁽¹⁾。しかし、それはむしろ中国辺境史の立場からの考察であり、その背後にある露清関係については扱いが不十分であった。一方、ソ連およびカザフスタンにおいても、カザフ＝ロシア間関係を始め多くの研究の蓄積があるが、ロシアと清朝それぞれの立場に対する理解に欠けるため、一面的な解釈になりがちであった⁽²⁾。早くは19世紀前半のリョーフシンがカザフは「どちらつかず dvusmyslennyi であった」とみなし⁽³⁾、これはその後のソ連における研究にも大きな影響を与えた。だが、これはロシアへのカザフの臣属を前提にしており、かつロシア史料に依拠するに留まるため、公平さを欠いていると言えよう⁽⁴⁾。ソ連期の研究の中では、モイセーエフの論が、カザフの独立性を強調する立場をとっている点で注目に値する。カザフスタンの独立は、カザフの視点からの考察を可能にしたが⁽⁵⁾、カザフ＝清朝関係史に関して、カザフ＝ロシア関係との違いも含めた統合的な分析はいまだ行われていない。

そこで本稿では、第一にロシア側史料と清朝側史料を比較し、カザフ、ロシア、清朝の三者それぞれの立場を把握した上で、1750～

60年代におけるカザフ＝清朝間の外交関係の初期の状況を分析したい。この時成立した三者間関係の枠組みは、19世紀におけるカザフの外交にも大きな影響を与えたと考えられるが、先行する研究はこの関連性に注意を払っていない。さらに19世紀前半のカザフ＝ロシア間の政治状況の変化にもなって、カザフと清朝の外交関係も変容を余儀なくされたはずだが、この相関についても分析に乏しい。それゆえ、18世紀後半から19世紀前半にかけての大ジュズおよび中ジュズ⁽⁶⁾のカザフと清朝との関係の実態を把握し、カザフにとって、清朝との関係は何を意味していたかを考察する必要がある。以上から、19世紀前半のカザフ＝清朝関係の変容の過程と、その中でのカザフのスルタン（王族）たちの役割とを新たに提示することを第二の目的とする。本稿における考察は、当時のカザフの政治的状況と外交の諸相の理解につながるばかりでなく、露清関係を含む複雑な諸勢力間関係を読み解くことにも貢献するだろう。

新しい史料として、アヤグズ（バルハシ湖北東端）に生まれタルバガタイ（塔爾巴哈台）に没したタタール人イマーム、クルバンガリー（1846-1913）の『東方五史』を利用する⁽⁷⁾。著者は、カザフのスルタンの子孫からも聞き取りを行い、東部カザフスタンの事情に精通していた。後代の著作ではあるが、口頭伝承の収集という性格も持ち、カザフ人による同時期の史書⁽⁸⁾にはない情報を多く有しており、同時代史料に乏しいカザフの歴史にとっては貴重な文献である。また、ロシア側史料としては、アンドレーエフの中ジュズに関する記録⁽⁹⁾が豊富な情報を提供し、コンシンが編纂したロシア帝国文書群もカザフ＝清朝関係に詳しい⁽¹⁰⁾。清朝側の史料としては、近年盛んに利用される檔案史料を、編纂されたものも含めてできる限り参照する⁽¹¹⁾。なお本稿の引用史料において、下線は筆者による強調を示している。

第1章 カザフの清朝への接近

（1）カザフの東遷と清朝の対応

まず清朝側から見たカザフとの関係の開始を整理しておこう。ジュ

ンガルの勢力が衰える18世紀中頃には、すでにハーン国は3ジュズに分かれ、各ジュズがそれぞれのハーン⁽¹²⁾を推戴していた。清朝の記録によれば、1755-57年にわたる清朝のジュンガル遠征およびアムルサナ討伐の過程で、カザフ(哈薩克)は清朝と交渉を持った。中ジュズ内で実権を持っていたアブライらは清朝に降表を差し出して帰順⁽¹³⁾するとともに、交易と清朝領内での遊牧を願い出た。カザフは皇帝の下へ入覲使節を送り、これに対してアブライらには、清朝から爵位が与えられた。

ジュンガル政権の崩壊後、カザフはアヤグズ河以東のジュンガル旧領へ進み、清朝の領域と近接するようになった。カザフにとって、この豊かな故地の回復は当然目指すべきことであった⁽¹⁴⁾。ただしこのアヤグズ河流域は、清朝が想定する自領域(界)内であったことに注意したい⁽¹⁵⁾。清朝は、1755年(乾隆20)より新疆北路の防備のための哨所として、タルバガタイ周辺に卡倫(カルン)⁽¹⁶⁾を設け始めた。とりわけ、タルバガタイからザイサン湖にかけて、冬季に東に移り、春季には再び西に戻る移設卡倫が置かれていたことは特徴的である。各卡倫を結んだ線は、清朝にとってはロシアと遊牧民に対する防衛線となった⁽¹⁷⁾。カザフは卡倫を越えての遊牧を請願したが、清朝はこれを公式には容認せず、むしろ塔爾巴哈台城などを設け(63-66年)、駐防を行った。

1761年より整えられ始めた「巡辺」制度⁽¹⁸⁾も、界内に侵入したカザフやクルグズ遊牧民らを摘発し、駆逐するためのものであり、タルバガタイやザイサンでの領内における遊牧は禁じられていた⁽¹⁹⁾。しかし、カザフの遊牧体系は広域にわたる冬営地と夏営地間の移動を必要としたため⁽²⁰⁾、すでに清朝界内には多くの遊牧民が侵入を繰り返しており、巡辺による抑止効果は低かった。

清朝政府の禁止にもかかわらず、タルバガタイからイリ(伊犁)にかけての卡倫線内への移住を願うカザフ⁽²¹⁾はとくに問題となった。中国の研究では、後述する冬季の徴税により、この問題がカザフの越境認可につながったとされ⁽²²⁾、一方でカザフスタンの研究は、カザフが卡倫内の土地を獲得したと論じている⁽²³⁾。しかし徴

税導入後の論の中で、移設カ倫が置かれたタルバガタイ北方において、春にカ倫が西方に戻された後のカザフの潜行が厳しく禁じられていることが確認されている⁽²⁴⁾ので、やはり通年での遊牧を許可したものは考えにくい。他方で、たしかに67年にカ倫内での「窮民の遊牧」が許可され⁽²⁵⁾、78年にカザフのニル（佐領）が編成⁽²⁶⁾されたが、その戸数は、清朝が把握していた中ジュズの総戸数（boigon）68000戸⁽²⁷⁾に比し、94戸であり、乾隆44年（1779）以降は「概ね収容しなかった」のである⁽²⁸⁾。したがって、こうした施策は規模、期間ともに限定的なものであったと考えられる。

家畜100頭につき1頭の割合で税⁽²⁹⁾を徴収する代わりに、冬季に限りタルバガタイでの越カを認めた伊犁將軍阿桂の進言こそ、「雪がひどくなると、たびたび界を越す」⁽³⁰⁾遊牧民への、現実的な対策であった。1756～60年代においてはロシアとの関係も緊張しており⁽³¹⁾、移住の許可や税による冬季越カという融和的な対策により、カザフを引き付けておく必要性が清朝にもあった。ただし「アルジャン alzhan のヴォロスチ⁽³²⁾は牧地を中国の都市イリのそばに持っており、家畜はキタイ [=中国] 人の所に、決められた支払いによって収容する」⁽³³⁾とあるように、タルバガタイの冬季カ倫のみならず、イリにおいても冬季にはカ倫内への移動が見られ、カ倫付近の遊牧も恒常的なものとなった。上に見た清朝の様々な対策にもかかわらず、夏を迎えてもカ倫内に潜住するカザフは、次第に増加していったことを確認しておきたい⁽³⁴⁾。

結果として、ニルに編成された一部を除き、カザフ遊牧民は越カを繰り返しており、カザフの清朝への帰属は不確実であった。そのことは、露清間の「中俄勘分西北界約記」（1864年）により、始めてカザフが帰属を明確にする必要に迫られたことにも表れている⁽³⁵⁾。カザフの遊牧地は、北はイルティシュ河上流およびザイサン湖周辺、ホブド方面からタルバガタイやイリ周辺へと広がり⁽³⁶⁾、今日の新疆におけるカザフ族の起源となったのである。

(2) ロシアが見たカザフ＝清朝関係

ジュンガルの滅亡は、この地方におけるロシアと清朝の境界が接近したことを意味し、清朝のロシア攻撃の意思の有無は、ロシアにとって重大な関心事となった⁽³⁷⁾。そのため、当時ロシアの境界を成していたイルティシュ要塞線を中心に情報が集められた。

清朝からみたカザフの帰順も、カザフとロシアにとっては、清朝との和解にすぎなかった。ロシア文書を見てみると、アブライと清軍は、1757年6月アヤグズ河畔にて「講和 primirenie を締結」⁽³⁸⁾したとある。文書は講和の内容について、以下のように続けている。

アブライ・スルタンはボグド・ハーン [=清朝皇帝] 陛下から、その署名を添えた文書を受け取った。その中で、アブライ・スルタンに対して、麾下の全ウルスと共に、ロシアへ去ったカルマクがかつて居たアルタイ・タウの地において遊牧をすることが命じられた⁽³⁹⁾。

この報告を見る限り、上述のカザフの遊牧地の問題に関連して、清朝皇帝からジュンガル旧領への移動の許可を与えられたと認識している。アブライの書簡も、「和平 mir を結び」、交易について「双方からの提案」があったと記している⁽⁴⁰⁾。クルバンガリーも、次のように和解により清から土地を与えられたものと解釈し、清朝史料とは異なる見方をしている。

和解 muṣāliḥa の後で、カザフはひそかにゆっくり歩き、前進を始めた。アヤグズ河を越え、アラ・コルへ、また一方ではザイサン、タルバガタイ山脈へ至った⁽⁴¹⁾。

また次の記述からは、カザフが自分達の移動を清朝から認められたものとして正当化していたことがうかがえる。

キタイ [=中国] の皇帝からも勅書があり、それにより『イリ』[河] とその周辺を、すなわちバルハシ湖へとつながる河口 [=セミレチエ地方] を、アブライ・ハーンへ夏営地と冬営地として与えたのであった⁽⁴²⁾。

次に、カザフの帰属をめぐる露清間の交渉について考察してみよう。カザフの遣使を受けた清朝は、ロシアに対して「カザフはボグ

ド・ハーン陛下の臣籍 poddanstvo 下にある」と宣告した⁽⁴³⁾。対するロシアは理藩院に宛てて、「アブライ・ハーンは、1040 [正しくは1740] 年に嘆息して、我々の臣属 harangga になりたいと署名し、天に誓った」と、カザフはロシアに属していることを主張し、この時の宣誓書を添付している⁽⁴⁴⁾。後の「ロシアからの書簡に、カザフがかねてよりロシアの属下にある、とあった」という、カザフに対する清朝皇帝の勅が指すのもこの文言であろう⁽⁴⁵⁾。

さらにロシアは小ジュズのヌラリ・ハーンの下へ使者を送り、「キタイ人は『アブライは自分達に属している poddalsia』と言うが、カザフは『[清朝と] 和平を結んだ』と言っている」と、清朝とカザフの言の違いを問いただした⁽⁴⁶⁾。他方、当のアブライからロシアへの報告は、「清朝に対して『ロシアに長く属しているので、清朝の臣籍を受け入れることはできない』と伝えた」という内容であった⁽⁴⁷⁾。これを受けてロシアより清朝へ使者が派遣され、再度「カザフは長年ロシアの臣籍下にある」ことが宣告されたのである⁽⁴⁸⁾。ただし、このロシア文書が続けて記す所では、この時北京に在ったカザフの使者もまた同様の趣旨を清朝に伝えたため、皇帝は当時準備していたロシアへの出兵を断念し、アブライへの勅はただ交易 (satorka) を行うことを望むものになったという⁽⁴⁹⁾。けれども清朝史料に従えば、清は、「彼ら [カザフ] が投降することを乞うた」と、カザフの自発的な帰順を重視し、ロシア側の主張を肯定することはなかった⁽⁵⁰⁾。つまりカザフは、ロシアに対しては、清朝の懐柔を寄せ付けず、ロシアの前衛となっているかのような姿を示すよう努め、清朝に対しては、ロシアとの関係に自ら言及することはせず、清への恭順を示し続けたのだ⁽⁵¹⁾。それゆえ清も、カザフとロシアとの関係について、「カザフにはもともと二心があった」と知りながらも⁽⁵²⁾、カザフの臣属を主張し続けたのだらう⁽⁵³⁾。このような関係が成立した背景として、ロシアが収集した情報の多くが、カザフからの伝聞に基づいていた事実がある。次の報告は、カザフの使者に対する清朝皇帝の懐柔を訴えたものである。

ボグド・ハーンは、訓戒と欺瞞の言葉を用いつつ [使者のスル

タンたちに言った]。彼らのカザフ民族はキタイ人と共に平安に暮らすべきで、彼ら [カザフ] の君主であるのだから、ボグド・ハーンからは自立しないように、と。何となれば、キタイ人はカザフとはその起源を同じくする同一の種族であり、遠き昔のチンギス・カンの分枝であるからだ、と⁽⁵⁴⁾。

真偽はともかく、この言葉を伝えることによって、カザフはロシアに対して、清朝の誘いには乗らない姿勢を示していたと考えられる。

また1760年代の清の越境取締りの強化については、ロシアへ次のような報告があった。

アブライ・スルタンは現在、キタイ人とはいかなる友好関係も持ち合わせていない。(中略) この秋、キタイのボグド・ハーンの命に従って、軍隊が集められ、聞く所によれば1200人が、カザフのウルスをジュンガルの地より激しく、厳しく追い立てた⁽⁵⁵⁾。

ここにも、清との関係が緊迫する中で、カザフは自らが清朝に属していないことを明示した上で、ロシアとの関係の維持に努めたことが示されている。こうして、清朝が意図するカザフへの処遇と、ロシアがみたカザフ＝清朝関係との間には大きな違いがあることが明らかになった。

最後に、ロシア史料に現れる「境界」の意味について考察しておこう。上述の清の領域観については、「キタイ人は、アヤグズ河までの土地を自分たちがジュンガルより征服したところとみなしている」とあるように、ロシアは正確な認識を得ていた⁽⁵⁶⁾。それでもロシアにとっては、アヤグズ河流域はすでに清から譲られたカザフの遊牧地に他ならなかったことが、次の記述からわかる。

この時 [=1757年]、カザフは草原より出て、ジュンガルの地を取った。(中略) そこはキタイ人より、(中略) アブライ・ハーンに与えられたものだった。イルティシュ河沿いを遡ってザイサン湖に達し、キタイの卡倫 karaul にそってタルバガタイ山脈を通過してイリ河に到り、こうして彼ら [カザフ] は自分たちの境界 granitsa の内に大バルハシ湖をも占めている⁽⁵⁷⁾。

そして「ウワク＝ケレイのヴォロスチは、(中略)冬になると馬をキタイの境界 grannitsy へ追い込む。そこでは彼らから冬季の収容のために、人質とはらず、100頭につき1頭が徴収される」⁽⁵⁸⁾ という徴税に関する記述からは、ロシア史料の示す清朝の境界とは冬季カ倫線を意味していたことが確認できる。先述のように、この税は、まさに冬季において、カザフがカ倫を越える際に課せられるものであったからである。

つまりロシアにとってはカ倫線こそが清の国境線であった。清朝は界内カ倫外の地域に官員を派遣することを通じて、自らが想定する境界の維持に努めていた。しかし、結局ジュンガル旧領へのカザフの移動は既成事実となり、さらに徴税によって、限定的であったにせよ、カ倫内のカザフの遊牧を認めたことで、カザフの移動を十分に統制できなくなったと言える。一方、カザフとロシアの交渉では、カザフはロシアに属するという態度を示していたが、露清間の交渉においては、両帝国はお互いの主張を譲らず、問題は先送りされた。このため、カザフの遊牧地の帰属、さらにはカザフ自身の帰属は、露清双方に対して曖昧なままとなった。この際、カザフ＝清朝間関係におけるロシアの影響力が、当初より大きかったことにも留意しなくてはならない。

第2章 カザフの「朝貢」

清朝から見れば、そもそもカザフ＝清朝関係の基本となっていたのは「朝貢」関係であった。朝鮮や琉球に代表される東・東南アジア諸国の朝貢に対して、内陸アジアからの使節は理藩院の管掌であり、性格を異にしていた⁽⁵⁹⁾。カザフを含む内陸の諸勢力については、清の支配論理に基づいて、「名目的朝貢国」⁽⁶⁰⁾、「外藩の外縁国」⁽⁶¹⁾、藩部と属国の特徴を併せ持つ「名義藩部」⁽⁶²⁾などの定義がなされているが、本稿ではあくまでもカザフの立場から、関係の意味を再検討することとしたい。

カザフは、遊牧地と交易のために、おもにハーン家一族のスルタン(トレ)⁽⁶³⁾と呼ばれる子弟を正使として、入覲使節を皇帝の許へ

派遣した。スルタンたちは上位の者から順に、漢語表記によれば、汗 (han)、王 (wang)、公 (gong)、台吉 (taiji) という爵位を授けられた。ただし、即位前のアプライがハーンを名乗り、その自称に基づいて汗爵を受けたことから分かるように⁽⁶⁴⁾、これらはカザフ自らが選出したハーンとは概念を別にするものだった。また、王・公の爵位を持つスルタンを、「カザフの人々はハーンやカーズィー qāzī と呼んでいる」⁽⁶⁵⁾ とあるので、封爵の事実は部族内でも知られ、スルタンの地位の強化に結びついたと考えられる。スルタンの死に際しては勅使が訪れ、後継者が新たに指名された⁽⁶⁶⁾。背景として、分立する各部族⁽⁶⁷⁾ が自らを統率するスルタンを必要としていたことも考慮に入れるべきである⁽⁶⁸⁾。

以下では、スルタンたちの入観およびそこから派生する交渉によって生じた恩典を整理しながら、カザフがロシアとの交渉を持ちながらも、清朝に恭順を示し、関係を継続した理由を考えてみたい。

(1) 入観

清朝の規定から、皇帝への拝謁の際にカザフの使者は馬を献上し、皇帝は下賜を行ったことが明らかであるが⁽⁶⁹⁾、ロシア史料は下賜の細部に言及しており検討に値する。乾隆60年(1795)の入観時に清から下賜と弔意を受けたスルタンについて、アンドレーエフの情報から以下のように整理できる⁽⁷⁰⁾。

のちに、1824年の入観使節に同行したタシュケント商人の報告に

	元宝銀 serebra iamb	カンフ kanf(中国製の繻子)
ワリー・ハーン Valikhan の子	12	20
トク Tok の兄弟	8	20
アガダイ Agadai	6(6)	10(10)
ジョシ Iuchi の子	6(6)	10(10)
サニヤズ Shaniiaz の子	4(4)	10(10)
マムルハン Mamyrkhan の子	2(2)	5(5)
ハンホジャ Khankhozha の妻の兄弟	4	1
アディル Adil' の子	4	1
サマ Sama の子	8	13

括弧内は、途上で死去したスルタンたちへの弔意として加増されたものを示す

よれば⁽⁷¹⁾、北京での43日間の滞在中、使節には1日につき2頭の羊が下され、のべ7度皇帝の下へ参じ、そのたびに衣服、カンフ、400ルーブル相当の銀が与えられ、さらに各スルタンには元宝⁽⁷²⁾4から6が加えられたという。これは表の情報とも合致しており、下賜の手厚さが確認できる。

規定によれば交通手段、滞在費等もすべて供与されることになっていた⁽⁷³⁾。これについても前述の商人が、9名のスルタンたちとその供人43名からなる使節団に対し、替え馬 (peremennaia loshad') が用意されたことを伝え、各人に供与された路銀、食料、茶の量にも言及している⁽⁷⁴⁾。

(2) 甲問使と承爵

清から汗・王・公の爵位を受けたスルトンの死去に際しては、勅使を通じて、甲意としての銀300両が贈られた。同時に後継者には襲封を認める勅書と「大緞四匹」が授けられた⁽⁷⁵⁾。ロシア史料も「18反の上質のカンフなど」が与えられたことを記録している⁽⁷⁶⁾。清朝の参贊大臣 (ambo) からの汗アブライの死に対する甲問使が、王アブルフェイズの下にもとどまり、多くの下賜 (podarki) がなされた事例があるので⁽⁷⁷⁾、汗・王・公の死に伴う甲問使の訪問は、その後継者以外にも下賜を受ける機会となったと考えられる。

(3) 新疆における交易

清と朝貢関係を結んだカザフには、新疆での交易が許され、それがカザフ側にとって大きな利益となるものだったことは確かである⁽⁷⁸⁾。前章の考察からも、カザフは交易の許可を清朝との講和の条件としていたことが分かり、その需要の大きさを知ることができる。なお交易については第4章で詳しく検討する。

(4) 貢馬

入観時のカザフからの馬の献上以外に、伊犁将軍や塔爾巴哈台参贊大臣に対しても、おもに交易の際に、馬を始めとする家畜の献上

が行われた。清朝史料では「伯勒克 (ボレク bōlak)」とも記される。次に示すのはイリにおける規定である。

毎年貿易後、各カザフの中で將軍に謁見しようとする者がいれば、予め報告し、官員は順序を定める。(中略)馬を献上する者がいれば、將軍はその値を考慮して、緞疋を賞給する⁽⁷⁹⁾。この規定の存在は、スルタンが派遣した隊商がしばしば貢馬を行っていたことを示している⁽⁸⁰⁾。その理由としては、大臣(アンバン)からの賞給もしくは下賜品が、貢納をはるかに上回る見返りとなったことが考えられる。次のクルバンガリーの記述はそれを裏付けている。

トレ töre の名前で馬の献上がなされた。献上品を徒勞に終わらせることなく、アンバン amban は彼らへ馬の価格以上の代価を与えた。[アンバンからの]祝儀を受けることは、商取引の許可を意味するのであった⁽⁸¹⁾。

またここから分かるように貢馬は円滑な交易と直結していたため、カザフにとっては交易のための「税 dan'」として認識されていたようである⁽⁸²⁾。1767年春の例では、この間にイリを来訪したカザフの中ジュズの部族による5つの隊商は、中国側に馬1215頭、牛297頭をもたらし、王アブルフェイズは伯勒克として馬2頭を託した⁽⁸³⁾。このように貢馬は概して10頭未満に過ぎず⁽⁸⁴⁾、取引量に比べて負担は少なかった。

(5) 盗人の送還と褒賞

頻発する家畜盗に関して、清朝と交渉を持ったスルタンたちは、部族の代表者としてこの調査に当たる責務を負っていたと考えられている⁽⁸⁵⁾。また「1785年、[王の]ハンホジャは、中国の境界付近でカザフが引き起こした幾つかの馬盗と殺人に関して、6人のカザフの賊人を清に差し出した」⁽⁸⁶⁾とあるので、清朝の立場から見れば、犯人引渡しに到るまでスルタンを通じての統制を試みたといえる。乾隆53年(1788)には、カザフがオイラトの馬を盗んだ際に、ボブ(博普)・スルタンが賊を捕らえたことにより、寶石頂雙眼花

翎の賞給が具奏されたことが知られ⁽⁸⁷⁾、嘉慶8年(1803)の例では、「カザフのアカラクチ⁽⁸⁸⁾のポスタン(博斯塘)は、官兵に付き従い、盗まれた馬と主犯を捕らえた」⁽⁸⁹⁾のだった。これは、清朝がスルタンや部族の有力者の協力を奨励し、それが彼らへの褒賞につながったことを意味している。

こうした清朝との関係はカザフにとって何を意味していたであろうか。次の記述は、これらの清との関係の諸相を総括したものとして解釈できる。

カザフの民はキタイへ[臣籍を]を宣言することのほかに、貢物を贈ること alim-berim については、何一つ面倒なことはなく、(中略)まさに一頭の馬以上の物を贈ってはいなかった。そしてこれを報酬なしで行うことすらしなかった。[清朝は]馬をもたらした者へ衣服や茶などを与え、送り出していた。トレたちへは、官庫から年俸の割り当てはなかったが、生前には敬意が払われ、死に際しては相続人へ哀悼を示すために、銀、家畜、羊、牛が供養料として下賜された⁽⁹⁰⁾。

ここから、カザフは清朝との関係を続けるにあたり、これまで指摘されてきた交易による利益以外にも、さまざまな機会を通じて清朝から物質的な利益を得ることに大きな魅力を見出していたと考えられる。また前章で見たように、カザフと清朝の関係が、ロシアに対する牽制となっていたことも想起しておきたい。次に、露清双方との関係の中でこのようなカザフ=清朝関係を可能にした背景を検討する。

第3章 露清両帝国への二方面外交

(1) ロシアと清朝の間で

繰り返しになるが、佐口透は18世紀後半を、露清両帝国へ臣属するという意味での「二重朝貢」の時代と位置づけ⁽⁹¹⁾、またソ連史学は「強かさ lavirovaniia」という語によって、アブライ・ハーンの外交を説明してきた⁽⁹²⁾。たしかに1740年にアブライらは中ジュズを代表してロシアに対し使者を派し、以後臣籍(poddanstvo)受

け容れの宣誓を繰り返していたが⁽⁹³⁾、その結果ロシアから与えられた年俸も、カザフを懐柔する狙いからのものであったと考えられている⁽⁹⁴⁾。アブライの曾孫ワリハノフも、19世紀初頭までは、ロシアの影響力はカザフ草原に及んでいなかったとみなしている⁽⁹⁵⁾。

一方、清朝側の論理においては、「汝ら〔カザフ〕がロシアと関係を持っても、正す所ではない」⁽⁹⁶⁾との認識であり、むしろ、カザフがロシアとの関係を維持することを容認するものであった。さらに上述のように、カザフ＝清朝関係の諸相がすべてロシアの知る所となっていたことに注目しておこう。ロシアは、カザフ以外にも、新疆北路とセミパラチンスクなどを往来していたタシュケント商人らをも利用して積極的に情報を集めていた⁽⁹⁷⁾。逆に清にカザフとロシアの交渉が伝わることは稀であった⁽⁹⁸⁾。情報収集の結果、アンドレーエフは、カザフの入覲について次のようにみなしている。

カザフが清朝に忠誠を示すのみならず、〔臣籍の〕宣誓 *prisiaga* まで行っているのは、褒賞を望むことだけが理由なのだ⁽⁹⁹⁾。

このような認識やカザフからの情報に基づき、ロシアもまた、カザフと清朝の「朝貢」関係には、積極的に介入しなかったと思われる。そのために、カザフの帰属が曖昧なままであったことは先に検討したとおりである。

以上の考察と、第1章での議論から、カザフは清朝とロシアの間において、双方の面目を尊重しつつ、それぞれに異なる態度を示すことによって関係を両立していたのだと言える。つまり、当時のカザフの大・中ジュズはあくまでも、清朝とロシアの双方に対して自律性をもった存在であった。そこで本稿では、両帝国への従属の意味を持つ「二重朝貢」という構図から離れて、カザフの自主的な立場を示すために、カザフのスルタンによる露清両帝国への「二方面外交」という視座を提示したい。第2章に見た清との関係も、カザフの側からみればハーン一族による二方面外交の一側面であり、ロシアとの関係においても、スルタンたちが中心となって交渉を行っていたことは明らかである⁽¹⁰⁰⁾。逆に言えば、この外交の展開を分析することは、両国との関係におけるスルタンの役割を浮き彫りに

するとともに、カザフの清朝との関係の実態にも、より近づくことになるだろう。

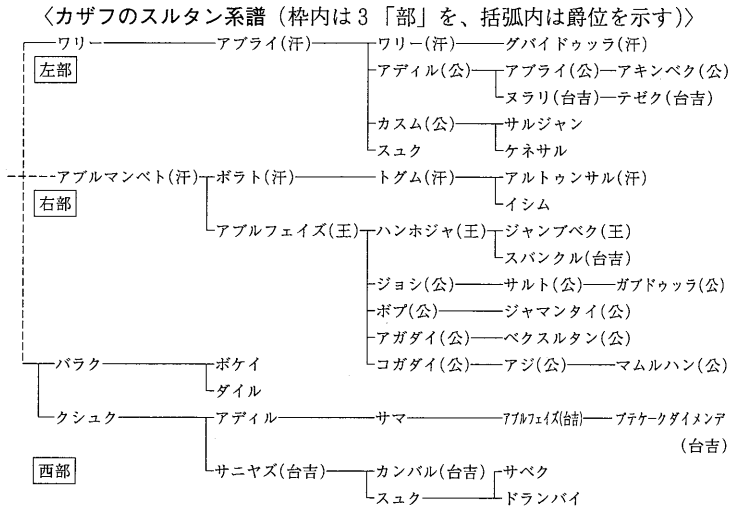
(2) 二方面外交のその後 (18世紀末~19世紀半ば)

清朝から汗爵を受けたアブライは、ロシアからも中ジューズのハーン(1771-81年)として認められたが、アブライの権力は絶対的なものではなかった⁽¹⁰¹⁾。とりわけ清の王爵を受けたアブルフェイズは、アブライと並んで対清交易にも従事する一方⁽¹⁰²⁾、ロシアとも交渉を持っていた⁽¹⁰³⁾。アブライの後を継いだワリーの影響力は、おもにアルゲン部族内に限られ、権力はさらに分散した⁽¹⁰⁴⁾。以後、大・中ジューズのスルタンたちには各自の独立した外交が見られるようになる。

まず、このような状況に対する、ロシアの対応を整理しておこう。清朝の汗爵を継承したワリーに対して、ロシアも公式に中ジューズのハーンとみなしたが⁽¹⁰⁵⁾、のちにその親清政策を警戒し⁽¹⁰⁶⁾、ボケイを代わりにハーンに指名した。さらにロシアは1822年に「シベリア・キルギズに関する法規」を定め、中ジューズのハーン位廃止を決定した⁽¹⁰⁷⁾。有力なカザフのスルタンは、西シベリア総督府治下の各管区のアガ・スルタンとして、ロシア統治の一端を担うこととなったのである。ロシアの意図は、シベリア(イルティシュ)要塞線の南進にあり⁽¹⁰⁸⁾、その後、中ジューズのスルタンの多くはロシアへの帰属を迫られ、サルジャン・ケネサル兄弟らの抵抗(1824-46年)⁽¹⁰⁹⁾にもかかわらず、ロシア統治下に組み込まれることから逃れられなかった。1850年代までに、セミレチエの大ジューズに属する部族もロシアに併合された⁽¹¹⁰⁾。

一方で、清はカザフに対する不介入の方針をとり⁽¹¹¹⁾、前章に見た「朝貢」を中心とする関係を続けていた。その際に、カザフのスルタンを左・右・西の3「部」⁽¹¹²⁾として分け、彼らに対して、2汗(初期には3)、1王、諸公、台吉の4爵位を授けた。次の系譜は、3部のスルタンと爵位の分布を示している⁽¹¹³⁾。

系譜中の「右部」コガダイの系統は、清朝とのみ交渉を持ったが、



その他の系統のスルタンたちは、アブライ没後も二方面外交を継続していた。「左部」における汗爵継承をめぐる混乱に代表される、1820年代のカザフをめぐる露清間の交渉において、清朝が控えめな態度を見せていたことは、前稿ですでに指摘した⁽¹¹⁴⁾。30年代以降、より明確になったロシアのカザフ草原進出に対しても、清は不干渉の立場を貫き、カザフとロシアの関係の深化について黙認していたと思われる。ロシアへのカザフの併合については、ロシアの南下が直接の要因となったことは言うまでもないが、清朝との関係の変化が与えた影響も考慮すべきである。以下に、清の態度を示す象徴的な事例を検討する。

「右部」の台吉スバンクルは、ロシアに反旗を翻したが1839年に失敗に終わった⁽¹¹⁵⁾。この時タルバガタイの大臣に対し、「私の父〔王ハンホジャ〕は清朝皇帝 hān の忠節者 daulat hāh でした。(中略)ロシアが来て私の部族を攻撃してきたのです」と、これまでの清との関係を交え、ロシアの干渉を訴えたが、大臣は「卡倫 qarāul の外で起こった出来事に口を出すことは、中国の例 li、つまり規定 nizām にはない」⁽¹¹⁶⁾と伝え、支援を拒否したという。これはかつ

てカザフとロシアの関係に対して示された「疆外の事は、もとより係わりあう必要のないことである」⁽¹¹⁷⁾ という原則と同様の態度であった。

ロシア史料も、「西部」のスルタンが清朝から離れつつある理由として以下の情報を挙げている。

サベクとドランバイは清の政府には全く不満足 nedovol'ny であった。それは、ロシアとの間に事が起こったときに彼等を守ってくれていないからである。ドランバイが類似の案件について 請願した際も、タルバガタイのアンバンは、『もし [カザフに] 利益があるならば、ロシアの臣籍 poddanstvo に入ってもよい』と答えたのだった⁽¹¹⁸⁾。

ここに見える清の不干渉の対応は、逆に言えば、カザフと清朝の「朝貢」関係が、もはやロシアへの牽制とはならなくなったことを意味する。ロシアは、「アヤグズ・コクベクト両河流域からは撤退しない」という方針を定め⁽¹¹⁹⁾、カザフが遊牧するアヤグズ河以東の土地、すなわち清朝の想定領域をも自身に属するものとみなせるようになったのである。咸豊元年（1851）には、ロシア元老院から理藩院への文書の中で、「該当の処 [=セミレチエ地方コクス河流域] のカザフはもともとロシアに所属している」との認識が示されるに至った⁽¹²⁰⁾。

結果として、カザフを取り巻く状況の変化により、二方面外交は有効に機能しなくなっていったと言える。また40年代になっても二方面外交を続けていたのは、中ジュズのバイジギト、クゼイ部族⁽¹²¹⁾ や大ジュズの諸部族（アルバン、ドゥラト、ジャラユルなど）を統率し、清朝の卡倫に近接して牧地を持っていたスルタン、すなわち系譜中の「左部」と「西部」のスルタンたちに限られていた。さらにロシアへの臣属か、清への帰属かを択一する必要に迫られた結果、1864年の条約締結後も清朝に「所属」とみなされた主要な部族は、クゼイ、ケレイ、アルバン部族のみとなった⁽¹²²⁾。

ここまでカザフと露清の関係について、特に清朝側の戦略という視点から考察を行った。その過程で、先行研究は着目していないが、

カザフの清朝との関係にも次のような変容が見られる。

カザフの最後の入観使節は1824年（道光3）のもので、イシムを正使とする9人の若いスルタンたちが入観を行った⁽¹²³⁾。その後は26年に伊犁將軍に入観を申し入れた事例はあるものの、ジャハーンギール・ホージャのカシュガル進軍により新疆の情勢が不安定となったため、許可が下りず、入観そのものは行われなかった⁽¹²⁴⁾。

承爵については1834年に右部のガブドゥツラが公爵を継いだ事例があるが、すでにアヤグズ管区庁においてロシアの官職に就いており、その公爵位は形だけのものにすぎず、清朝との交渉もロシア当局の監視下にあった⁽¹²⁵⁾。32年に公爵を継いだ左部のアキンベクを中心とする大ジュズ⁽¹²⁶⁾のスルタンたちは、以下のように清朝との関係を持ち続けたが、46年にはロシアの官爵を授かり⁽¹²⁷⁾、ロシアとの関係を深めることになった。以後の爵位継承は、清に完全に帰属した部族のスルタンに限られている⁽¹²⁸⁾。

家畜盗や略奪に関して、清朝は19世紀半ばに至るまで問題視し、その摘発をスルタンに求めていたことがわかる。1849年（道光29）に、伊犁將軍が「カザフの公アキンベクに〔賊を〕探し出して捕らえることを厳諭した」とあるように、カザフの盗賊問題の解決をスルタンに命じ、家畜の返還により褒賞も行っていったからである⁽¹²⁹⁾。また同年に「租馬20匹、伯勒克馬25匹」、翌1850年にも「租馬17匹、伯勒克馬7匹」が徴収されたとの報告がある⁽¹³⁰⁾。つまりこのスルタンが統率するカザフは、清朝への納税と貢馬を続けていたのである。

以上から、カザフと清朝の関係の中でも、清朝中央政府とのつながりは薄れ、現地におけるより現実的な問題に関わる交渉が続けられていたことが分かる。カザフの帰属の曖昧さゆえに問題となり続けた越カに対する徴税と貢馬については、新疆現地当局が対応する必要がある、そこにおいてカザフとの関係も維持された。その結果として、次章で検討する交易も継続されていたと考えられる。交渉の重点が政治・外交上の駆け引きから経済的な側面へと移ったとも言える。ただし、次章で述べるように、交易の帯びる性格もまた変

化を免れえず、そこに関わるスルタンの役割も変っていったのである。

第4章 露清間におけるカザフのスルタンの役割

(1) 清朝との「哈薩克貿易」

清との関係の中で、従来最も注目されてきた交易についても、19世紀におけるロシアの進出の影響を受け変化がみられた。本章ではその背景から見直し、詳しく分析する。清朝との関係を持ったスルタンは、属下のカザフ隊商をイリ、タルバガタイへ（初期にはウルムチ、カシュガルへも）派遣し、自らの家畜と中国産の領布、紬緞、茶葉などとの交換を行う権利を持った⁽¹³¹⁾。この「哈薩克貿易」においては、「卡倫に到着した時、必ず、カザフの王・公・台吉の請願書を持参し、卡倫を守る官兵に差し出さなくてはならない」⁽¹³²⁾とあるように、ほかならぬカザフのスルタンの書面を提示する必要があったことに注意しておきたい。清朝檔案史料からは大ジュズのウイスン、スワン、中ジュズのトルトウル、ナイマン、ムルン、マタイ、バイジギト、バセンチン、プラの諸部族の名が確認できる⁽¹³³⁾。これらは清朝と交渉を持ったスルタンが統率していた各部族に対応しており、スルタンたちの清朝との関係を基礎に交易が可能であったことが確認できる。

この交易が双方の需要に叶ったものであったことについては、すでに佐口透により「絹馬貿易」の語で示されている。ただし先行研究は、19世紀前半から半ばにかけての状況の変化には触れておらず⁽¹³⁴⁾、新たな検討が必要とされる。

(2) ロシア＝清朝間の交易の媒介

一方で、ロシアにも19世紀初頭以来、イルティシュ要塞線の東端ブフタルミンスクにおける清朝との交易の需要があった。すでに1804年と1810年には、ロシアの隊商が、新疆におけるカザフのスルタンの名前による交易を試みている⁽¹³⁵⁾。1810年代からは清朝からも商人が訪れ、キャフタに次ぐ露清間交易の中心となっていた⁽¹³⁶⁾。

ただし、主要な交易路であるセミパラチンスクから新疆北路への道は、カザフの遊牧地を通過せざるを得なかったことに注意したい(137)。

こうした情勢を背景として、1811年、シベリア要塞線勤務のタタール語通訳官プティムツェフは、交易に関する情報収集のために隊商を伴い清朝領へ向かった(138)。プティムツェフらはまずカザフのカンバル・スルタンにタルバガタイの大臣への紹介書状 (pis'mo)(139)を求め、タシュケント人の名前を騙ってタルバガタイに入り、家畜を売却した(140)。次にサルト・スルタンより、伊犁將軍 (Zhandzhun) にあてた清朝皇帝への敬意と交易の許可を求める書簡(141)を預かりイリへ赴いた。自分達の商業活動に関しては、その報告中に、「ロシアの商品は、この町へ、まさにカザフのスルタンたちの名前 (ot imeni Kirgizskikh Sultanov) でもたらされる」(142)とあり、スルタンの役割がうかがえる。

一方、1830年の例では、セミパラチンスクの商人が、サルト・スルタンからの「イリへの通行証によって、カザフ草原を安全に通ることができた」(143)というから、カザフの略奪への対応という意味からもカザフのスルタンの保護を必要としたと考えられる。

こうしてタシュケント (コーカンド) やブハラ商人らに加えて、ロシア籍の商人も、イリやタルバガタイにおいてロシア商品の交易を始めるようになった(144)。ロシア人の入境は公式には認められず(145)、カ倫の通過と新疆北路における取引にはカザフ王公の証書が必要であった(146)。40年代には、すでに新疆においてロシア人による直接の取引が始まっていたが(147)、なおカザフのスルタンによる交易も続いていた。カザフの商品と家畜には関税が課されていないので、次のように、これを利用するロシア商人も存在していた(148)。

ドランバイ・スルタンに属しているカザフからは何も [関税は] 取られていない。彼の名前は時に、彼の牧地 aul に滞在する商人達 [ここではロシア籍タタール商人] により利用される。自分の家畜を彼のものと偽って、カザフ人とともに送るか自身

でタルバガタイへと追い込む⁽¹⁴⁹⁾。

さらなる手段として、ロシア商人は、カザフのスルタンから隊商のアカラクチ（カザフ語 aqalaqshy=隊商長）として指名を受け、露清間の交易に従事した。ロシアの認識では「カザフのスルタンたちは、我々〔ロシア〕のキャラバンを自分たちの保護のもとに置き、商人の頭として能力ある人物を指名し（中略）、彼等に安全に交易を行う資格を与える」のであった⁽¹⁵⁰⁾。クルバンガリーは、カザフの交易に従事するアカラクチの役割を次のように説明する。

トルキスタンとフェルガナの周辺から〔カザフの〕諸部族の所へ来た商人たちは、家畜を追い込んで売り、都市の商品のういでキタイにはどれが適当であるのかを知り、タシュケント、マルギラン、ナマンガン、アンディジャンなどの都市から、キタイに向いた品物をもたらしようになった。トレたちのアカラクチ qalaqçi、すなわちトレに仕えていた者が、彼らの命を実行するために来て、〔新疆の〕都市へ入るのだった。このようにしなければ、キタイは自分の臣属 taba'a 以外を都市へ入れなかった⁽¹⁵¹⁾。

これはコーカンド商人に関する記述だが、ロシア籍商人についても同様の手段が取られたと考えてよい。というのも、1845年におけるロシア人のアカラクチ akhalakchi が知られ、卡倫を越える際に、誰がアカラクチであるかの確認がなされているからである⁽¹⁵²⁾。

いずれにせよ、上のような手段によって、スルタンが保護した隊商は家畜を取引するにとどまらずロシア商品を清朝へもたらした⁽¹⁵³⁾。スルタンはロシア=清朝間の交易を仲介する役割を担い、仲介はスルタンにも利益をもたらすものであった。これについては、「隊商は通常有力なスルタンの保護のもとに派遣され（中略）、選ばれたスルタンは前払いを受け取り、自身が同行するか、彼に近い人物が派遣される」という1845年前後の隊商についてのロシア商人の記録が残されている⁽¹⁵⁴⁾。新疆におけるカザフの交易は、このようにして形を変えながらも継続されていた。

ただし、1851年の伊犁通商条約締結により、ロシア人の通商が正

式に認められると、新疆の国際交易は次の段階に進んだ。その後もスルタンの隊商は新疆へ派遣されたが、すでに自分たちの家畜を扱うに過ぎなかった⁽¹⁵⁵⁾。

おわりに

本稿では、まずカザフと清朝の初期の関係を検討した。カザフは、すでにロシアとの交渉を持っていたため、カザフをめぐる境界と領域についての認識は三者三様となった。この三者にとってのカザフ＝清朝関係は以下のように整理できる。

- ①清朝…「朝貢」と徴税により、カザフを統制
- ②カザフ…「朝貢」関係の尊重による、利益および清朝との安定した関係の獲得
- ③ロシア…カザフの清朝への遣使と清朝への臣属との区別（カザフはロシアに従属）

カザフのスルタンは清朝と「朝貢」関係を結びつつも、その関係は清への帰属を意味しないことをロシアに示し、ロシアとの交渉も持ち続けた。露清の交渉によってもカザフの帰属をめぐる矛盾は解消されず、カザフの清朝への帰属は曖昧なものにとどまっていた。こうしてカザフ＝清朝間関係においては、当初より、ロシアという清の支配論理の枠に収まらない要素を無視できず、そのような当時の状況こそが、カザフが露清両帝国との関係を両立させる二方面外交を可能にしていたのである。

19世紀に入り、ロシアの進出と清朝の不干渉の方針が明確になる中で、カザフの二方面外交は有効性を失っていった。カザフと清朝との関係も変容をまぬがれず、特に1830年代以降、清との「朝貢」関係は形骸化したと言える。ただし徴税や貢馬、交易などの現実的な関係は継続されていた。とりわけ経済上重要な位置を占めていた交易において、スルタンたちは、清朝との関係を維持しつつ、その裏で露清間の仲介の役割を果たしていたことが明らかになった。

さて、カザフと新疆当局との交渉は、新疆と清朝中央政府との関係も含めて、ロシア側の現地機関である西シベリア総督府との交渉

と比較することが不可欠である。また内陸アジアからの「朝貢」についても、コーカンド・ハーン国、クルグズ、アルタイ諸部族との比較が必要になると思われるが、清朝檔案史料へのアプローチもあわせて今後の課題としたい。

註

- (1) 佐口透1963『十八—十九世紀東トルキスタン社会史研究』吉川弘文館、同1966『ロシアとアジア草原』吉川弘文館、同1986『新疆民族史研究』吉川弘文館。ここに提示されたカザフと清朝の公式な交易関係の枠組みは今でも有効だが、19世紀前半における変容には触れられていない。
- (2) この主題に関する研究史は Левшин, А., *Описание киргиз-казачьих или киргиз - кайсацких орд и степей*, СПб, 1832 (Алматы, 1996) に始まるといえる。18世紀に関するソ連期の研究は Сулейменов, Р. Б. и Моисеев, В. А., *Аблай-хан*, Алматы, 2001 に整理されている。Гуревич, Б. П., *Международные отношения в Центральной Азии в XVI - первой половине XIX в.*, Москва, 1979 は、カザフ以外の中央アジアの諸勢力についても考慮し、広く国際関係を扱うものの、カザフとロシアの関係に主軸を置き、カザフを媒介とした露清間の交渉に注意を払っていない。Хафизова, К. Ш., *Китайская дипломатия в Центральной Азии (XIV - XIX в.в.)*, Алматы, 1995 は中国との関係に主眼を置いた結果、ロシアとの関係が及ぼした影響を明らかにしていない。
- (3) [Левшин : 236]。
- (4) [Сулейменов и Моисеев : 161-2]。
- (5) 近年のカザフスタンにおける成果は *История Казахстана*, т.3, Алматы, 2001 (以下、ИКと略記) に集約されている。
- (6) 「ジュズ」はカザフ遊牧集団における部族連合を指す(宇山智彦「カザフ民族史再考—歴史記述の問題によせて」『地域研究論集』2(1)、1999年、97頁)。大ジュズの各部族は現在のカザフスタン南東部を中心に、中ジュズはカザフスタン中央から東部にかけて遊牧を展開していた。
- (7) Qurbān'Alī Hālidī, *Tavāriḥ-i Ḥamsa-yi Šarqī, Qāzān*, 1910.
- (8) Шәкәрім Құдайбердіұлы, *Түрік, қырғыз-қазақ һәм хандар шежіресі*,

- Орынбор, 1911 (Алматы, 1991) など。
- (9) Андреев, И. Г., *Описание Средней орды Киргиз-кайсаков*, СПб, 1875 (Алматы, 1998)。著者は1763～1824年にかけてイルティシユ要塞線の軍務に就き、大尉まで進んだ。再刊に際して1789-1800年の日誌等が付され、利用価値が高い。
- (10) Коншин, Н.1900 "Материалы для истории Степного края," *Памятная книжка Семипалатинской области на 1900*, Вып.IV, Семипалатинск, с.1-68+69-117; Коншин 1902 "Материалы для истории Степного края," *Памятная книжка Семипалатинской области на 1902*, Вып.VI, Семипалатинск, с.1-54 ; Коншин 1903 "Материалы для истории Степного края : 5.," *Записки Семипалатинского Подотдела западно-сибирского отдела ИРГО*, Вып. I , Семипалатинск, с.1-109。この史料については拙稿2002a「露清関係上のカザフスタン——1831年アヤグズ管区開設まで——」『中央アジアにおける共属意識とイスラムに関する歴史的研究』(新免康編、平成11年度～13年度科学研究費補助金報告書)、119-133頁を参照。
- (11) 中でも林永匡・王熹『清代西北民族貿易史』(北京:中央民族学院出版社、1991年)は、軍機処録副を駆使し交易の詳細を分析したものである。
- (12) 15世紀後半より、「カザフ qazāq」の名は史料中に現れ、チンギス・カンの長子、ジョチの子孫が代々ハーンを称していた(Султанов, Т. И., *Поднятые на белой кошме. Потомки Чингиз-хана*, Алматы, 2001, с. 128-130)。
- (13) 勅によれば、カザフは、クルグズ、タシュケント、アンディジャン、バダフシャンと並んで「内附」した(『大清高宗純皇帝実録』巻613、14頁、乾隆25年(1760)5月庚午諭)(以下、高宗と略記)。
- (14) [ИК: 187,250] 参照。
- (15) ジュンガル旧領を含む、バルハシ湖、チューおよびタラス河までの範囲 [佐口1986: 380]。
- (16) 新疆のカ倫は常設、移設および臨時的な添撤の三種に区分される(于福順「清代新疆卡倫述略」『歴史研究』第4期、1979年、75-86頁)。
- (17) 厲声1995『中俄伊犁交涉』烏魯木齊:新疆人民出版社、12頁。
- (18) 厲声1994a「清代新疆巡辺制度研究」『西域考察与研究』新疆人民出版社、411頁。

- (19) 「アブライはかつてタルバガタイなどの処において遊牧することを懇請したが、朕は許していない」[高宗：巻613、15、乾隆25年（1760）5月庚午諭]。
- (20) 蘇北海1989『哈薩克族文化史』烏魯木齊：新疆大学出版社、339頁。
- (21) [高宗：巻759、5、乾隆31年（1766）4月丙辰諭]などの事例。
- (22) 斎清順「論近代中俄哈薩克跨境民族的形成」『西域研究』1、1999年、81-90頁。また[厲声1994a：415-6]はこの徵税により「界内卡外」の遊牧を認めたとするが、春季の驅逐の例とは整合していない。
- (23) [ИК：187]。
- (24) [高宗：巻796、6、乾隆32年10月癸亥諭]。
- (25) アブライへの勅諭[高宗：巻793、21、乾隆32年8月己丑諭]。
- (26) これについては小沼孝博2003「論清代唯一的哈薩克牛泉之編設及其意義」(朱誠如主編『清史論集——慶賀王鍾翰教授九十華誕』北京：紫禁城出版社、568-575頁)。
- (27) 乾隆23年にカザフが清朝に提出した部族表による(中国第一歴史檔案館蔵軍機處滿文録副奏摺、1679-6/47-2594)。
- (28) 永保編、興隆増補『塔爾巴哈台事宜』(『中国方志叢書』台北：成文出版社、1968年)巻1、22-3頁。1771年のトルゲート回帰に伴い、カザフ收容の必要性も消滅したという見解もある(張永江『清代蕃部研究——以政治變遷為中心——』哈爾濱：黒龍江省教育出版社、2001年、160頁)。
- (29) [高宗：巻780、35、乾隆32年3月己卯諭]。カザフ語では税を意味するアルム *alyum* と呼ばれた [Андреев：60]。
- (30) [高宗：巻780、34-35]。
- (31) 当時の西シベリアをめぐる露清間の緊張については[Гуревич：145-158]。
- (32) ロシア史料におけるカザフの集団の単位。中国史料の「鄂拓克」に相当。
- (33) [Андреев：78]。
- (34) [佐口1986：406-7]。
- (35) 住民の帰属は、その居住地の帰属に拠ることが定められた(『新疆簡史』第2冊、新疆人民出版社、1980年、78頁)。
- (36) Муқанов, М. С., *Этнический состав и расселение казахов Среднего*

жуза, Алма-Ата, 1974, с. 119.

- (37) *Казахско-русские отношения в XVI-XVIII веках*, Алма-Ата, 1961, с. 592
(以下、KPO と略記)。
- (38) カザフの部族長がロシア軍人にもたらした情報 (*Международные отношения в Центральной Азии XVII - XVIII вв.*, кн.2, Москва, 1989, с. 82 (以下、МОЦА と略記、またロシア史料上の日付については露暦で示す)。
- (39) [Там же : 83]。
- (40) 1758年1月付け [KPO : 548]。
- (41) [Qurban ali : 258-9]。
- (42) [ibid. : 439-40]。
- (43) 1757年6月22日 [МОЦА : 114]。
- (44) 露暦1758年2月17日、ロシア元老院からのラテン文文書の翻訳 [軍機處満文録副奏摺 : 1688-12/48-1110]。
- (45) [高宗 : 卷580、20、乾隆24年2月壬戌論] (露暦の1759年2月26日に相当)。
- (46) 1757年9月 [Сулейменов и Моисеев : 74]。
- (47) 1758年10月14日 [МОЦА : 132]。
- (48) 1759年9月30日 [Там же : 147]。
- (49) [Там же : 148]。
- (50) [高宗 : 卷580、20]。
- (51) [高宗 : 卷580、19]。
- (52) [高宗 : 卷1094、1-2、乾隆44年(1779)11月辛巳朔論]。
- (53) 清は19世紀半ばまで、カザフは自らに属しているという認識をカザフとロシアに示し続けた [拙稿2002a : 127]。
- (54) アプライの許を訪れたロシア通訳官の1761年の報告 [KPO : 621]。
- (55) 1761年のカザフ部族長の報告 [Там же : 632-3]。
- (56) [Андреев : 59-60]。
- (57) [Там же : 48]。
- (58) [Там же : 73]。
- (59) 片岡一忠「朝賀規定からみた清朝と外藩・朝貢国の関係」『駒沢史学』52、1998年、260頁。

- (60) [佐口1986 : 434]。
- (61) [片岡 : 256]。
- (62) [張 : 155]。
- (63) カザフ社会におけるスルタンの役割については [ИК : 199]。
- (64) アプライへの諭に「汝が汗を称するならば、朕は [これを] 加封する」とある [高宗 : 卷543、17、乾隆22年7月丁未諭]。カザフが清朝から受けた爵位については、[小沼2003] に示されたカザフの「エジェン＝アルバトゥ」関係に関する考察も含め、別稿にて検討したい。
- (65) [Qurban ali : 306]。
- (66) 清朝政府の決定によっていたという [Андреев : 228]。
- (67) 拙稿2002b「清朝史料上の哈薩克(カザフ)三「部」」『滿族史研究』1号、16-17頁。
- (68) 一例として、ケレイ部族の代表が、部族のトレを派するよう求めた結果、アブルフェイズはその子コゲデイを遣わしたという(蘇北海1989「近現代新疆哈薩克族宗法部族部落」『新疆大学学报』4号、17頁)。
- (69) 託津等『欽定回疆則例』(道光22年修訂本) 卷4の規定による [佐口1963 : 295-297]。
- (70) [Андреев : 208-9] より作成。清朝史料の記述にも対応している(徐松・松筠『欽定新疆識略』道光元年(1821)、卷12、11-31頁)。
- (71) [Коншин1900 : 79-81]。
- (72) 1元宝は銀50両であり、1845年のスヴェルドロフスクにおいて、約400紙幣ルーブルに相当した [Любимов : 293] (“ [Путевой журнал поездки на восток Н. И. Любимова, 1845 года] ” (Валиханов, Ч.Ч., *Собрание сочинений в пяти томах*, т.4, Алма-Ата, 1985, с.278-326。))。
- (73) 註(69)と同様 [佐口1963 : 295]。
- (74) [Коншин1900 : 79-81]。
- (75) 王ハンホジャへの勅諭 [高宗 : 卷1189、2-3、乾隆48年(1783)9月甲辰諭]。
- (76) 1784年2月にハンホジャの下へ到着した勅使。使者はカザフ側からの進物は受け取らなかった [Андреев : 43-5]。
- (77) [Там же : 41]。

- (78) [佐口1963 : 332-5]。これがいわゆる「朝貢貿易」と区別すべきものであることについては [佐口1986 : 299-300] ; Millward, J. A., *Beyond the Pass : Economy, Ethnicity, and Empire in Qing Central Asia, 1759-1864*, Stanford, 1998 p. 47-48.
- (79) 格琿額『伊江彙覽』（『新疆稀見史料彙輯』北京：全国図書館文献縮微複製中心、1990年）、76-7頁。タルバガタイには謁見のための来賓館があった [塔爾巴哈台事宜：卷3、13]。
- (80) タルバガタイでの貢納については [Любимов : 289]。
- (81) [Qurban ali : 307]。
- (82) Валиханов, Ч. Ч.1985а "Дневной журнал 1855 г.," *Собрание сочинений в пяти томах*, т.4, Алма-Ата, с.379。
- (83) [林・王 : 342]。
- (84) 乾隆27~28年の6件から [林・王 : 287-296]。
- (85) [佐口1986 : 415]。
- (86) [Андреев : 42]。
- (87) [塔爾巴哈台事宜：卷4、27]。
- (88) ここではアカラクチ（阿哈拉克齊）は部族の有力者を指していると思われる。
- (89) [塔爾巴哈台事宜：卷4、28]。
- (90) [Qurban ali : 306]。
- (91) [佐口1966 : 186]。
- (92) [Сулейменов и Моиссеев : 161]。
- (93) [Там же : 113]。
- (94) [Там же : 102]。
- (95) Валиханов, Ч. Ч.1985b "[Статьи из «Географического-статистического словаря Российской империи»]," *Собрание сочинений в пяти томах*, т.4, Алма-Ата, с.201。
- (96) [高宗：卷580、20]。
- (97) [Андреев : 227]。
- (98) [拙稿2002a : 124]。
- (99) [Андреев : 43]。

- (100) Бижанов, М., "Социальные категории казахского общества XVIII века в трудах русских ученых," *Казахстан в XV-XVIII веках*, Алма-Ата, 1969, с. 160-61.
- (101) [ИК : 254].
- (102) 1758年から1766年のウルムチにおける交易のみをとりあげても、アブルフェイズの関与した隊商の派遣は13度に及んだ [林・王 : 140-193].
- (103) セミパラチンスクへの使者の例 [KPO : 635-8].
- (104) ボケイの兄弟ダイルらもハーンを自称している [ИК : 272].
- (105) [Там же : 272].
- (106) 1805年、ワリーは清朝領内への移動を企てた。このワリーの意図が中国に利用され、ロシアの影響力が低下しかねないとの危惧がロシア外務省に報告された (*Русско-китайские отношения в XIX веке*, Москва, т.1, 1995, с.214-5)。
- (107) [拙稿2002a : 124].
- (108) 「法規」第316項 [Левшин : 426].
- (109) 坂井弘紀「英雄叙事詩が伝える“ケネサルの反乱”」『イスラム世界』44号、1994年、19-36頁。
- (110) [ИК : 370].
- (111) 小沼孝博2001「19世紀前半「西北辺疆」における清朝の領域とその収縮」『内陸アジア史研究』16号、69頁。
- (112) [拙稿2002 b].
- (113) [佐口1986 : 421-9] の系譜情報は正確だが、1820年代以降の事情を補う必要がある。
- (114) [拙稿2002a : 125-7].
- (115) [Коншин1903 : 40-50] ; [Qurban ali : 467-8].
- (116) [Qurban ali : 469].
- (117) 道光4年(1824)の伊犁將軍への上諭 ([拙稿2002a : 125] 参照)。
- (118) バイジギト部を統率するドランバイの牧地にいたタタル商人の情報 [Любимов : 304]。ロシア外務省アジア局副長リユビーモフは、1845年にイリとタルバガタイに潜入し、この記録を残した。
- (119) 1831-32年のシベリアおよびアジア委員会会議の決議による (Бабков,

- И. Ф., *Воспоминание о моей службе в Западной Сибири 1859-1875 г.*, СПб, 1912, с. 152-3)。
- (120) 咸豐元年1月24日付け(故宮博物院明清檔案部編『清代中俄關係檔案史料選編』第3編、上冊、北京:中華書局、1979年、5頁)(以下、中俄關係と略記)。
- (121) 1855年、クゼイ部族のプテケ・スルタンが、「兩者 [=露清] の君主を尊重し、自分が清の命令 *nachal'stvo* にも、ロシアの命令にも従えるように、[子の]クダイメンデをイリに送った」とある[Валиханов1985a:372]。
- (122) 袁大化・王樹枏編『新疆圖志』宣統3年(1911)、卷16、3頁。
- (123) [Коншин1900:79-81]。
- (124) [Там же:112]。1828年と30年にも入観の予定のみが報告されている[佐口1963:302]。
- (125) Центральный государственный архив Республики Казахстан. Ф.338, оп.1, д.855, л.1。
- (126) 19世紀初頭より、南カザフスタンのカザフには、徴税などによるコーカンド・ハーン国の影響力が少なくなかった[ИК:291-2]。「[大ジューズのカザフは]誰にも従属しておらず(中略)、圧迫を受けた時は、状況に応じて、清朝あるいはロシアあるいはコーカンドに属すると答えるのだ」[Любимов:305-6]という記述があるように、清朝カ倫線近くのカザフについてもコーカンドとの関係を見逃す部分があるが、紙幅の制限もありここでは詳しく論じない。
- (127) Бекмаханов, Е., *Казахстан в 20-40 годы XIX века*, Алма-Ата, 1947, с.320。
- (128) [新疆圖志:卷16、3]。
- (129) 咸豐元年(1851)6月20日、奕山らの奏[中俄關係:9]。
- (130) 註(129)と同様[中俄關係:11]。
- (131) [佐口1966:237]。
- (132) 道光30年(1850)3月21日、薩迎阿と奕山の奏文(『籌辦夷務始末(咸豐朝)』中華書局、卷1、1979年、3頁)。
- (133) 乾隆年間のイリにおける交易に関与した部族から抽出した[林・王:213-216]。

- (134) [佐口1963 : 343-4] ; [Millward]。また [林・王 : 452] のロシア商人とカザフの関係についての指摘はロシア史料と一致しない点が多い。
- (135) 1825年のロシア文書より (Валиханов, Ч. Ч. 1985c "Рапорт бухтарминского коменданта о состоянии местной торговли," *Собрание сочинений в пяти томах*, т. 4, Алма-Ата, с.259-60)。
- (136) 厲声1994b『新疆対蘇(俄)貿易史1600-1990』新疆人民出版社、44-51頁。
- (137) 1845年当時の隊商路については Валиханов, Ч. Ч. 1985d "От Семипалатинска до города Чугучака чрез Аягуз"; Валиханов, Ч. Ч.1985e "От Семипалатинска до города Кульджи," *Собрание сочинений в пяти томах*, т. 2, Алма-Ата, с.339-340。
- (138) その報告は次の形で公にされた Путимцев, Г., "Дневные записи переводчика Путимцева в проезде его от Бухтарминской крепости до китайского города Кульджи и обратно в 1811г.," *Сибирский вестник*, Ч.7-8, 1819, 1-68+69-94。
- (139) [Там же : 16]。
- (140) [Там же : 20]。
- (141) [Там же : 34]。
- (142) [Там же : 74-5]。これは「18世紀末から19世紀初にかけて、イリ、タルバガタイにおけるロシア商人は既に普遍の存在であり、カザフ王公の通商証明を帯びる必要は消滅した」という [厲声1994b : 44] への反証となる。
- (143) [Коншин1902 : 28]。
- (144) ロシアからはラシヤ、なめし皮、家畜が、中国からはキャラコ、綿織物、茶、銀が主な商品となっていた [Гуревич : 216-218]。
- (145) [Любимов : 289-290]。
- (146) ロシアの商人に対し、「前線の卡倫 piket に到着した際に、サルト・スルタンの書簡により何一つ支障なくイリへの通行が認められた」とある [Коншин1902 : 28]。
- (147) Алдабек, Н. А., *Россия и Китай : Торгово-экономические связи в центральноазиатском регионе XVIII - XIX вв.*, Алматы, 2001, с. 78。

- (148) [Любимов : 303]。
- (149) [Там же : 307]。
- (150) [Валиханов1985c : 259-60]。次の研究はカザフの仲介を指摘するもの、それを可能にした状況についての考察を欠く (Касымбаев, Ж. К., *Казахстан – Китай : караванная торговля в XIX в начале XX веков*, Алматы, 1996, с.51)。
- (151) [Qurban ali : 306-307]。ワリハノフもアカラクチを「隊商の頭」とみなしている (Валиханов, Ч. Ч.1985f "О торговле в Кульдже и Чугучаке," *Собрание сочинений в пяти томах*, т.2, Алма-Ата, с.258 : 260)。
- (152) [Любимов : 286]。
- (153) [Любимов : 287]。
- (154) 《Записка купца Владимира Кузнецова о торговле с Кульджею,》
Прошлое Казахстана в источниках и материалах, сб.2, Алматы, 1998, с.174.
- (155) 1855年の事例より [Валиханов1985a : 365]。